Osaka University Knowledge Archive

Title	中世僧伝の形成と展開
Author(s)	山崎, 淳
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44125
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【4】

氏　　名	山崎　淳（やまざき　じゅん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　17268　号
学位授与年月日	平成14年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学　位　論　文　名	**中世僧伝の形成と展開**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　助教授　荒木　　浩

論文内容の要旨

本論文は、中世の僧伝についての考察で、西行の『西行物語』と、明恵の『明恵上人行状』を中心にしながら、本文と伝本、成立の典拠となった資料、作者が対象をどのような人物像として造型しようとしたのかその執筆意図、後世への影響などを体系的に考察したもので、貴重な資料紹介もふくめておよそ400字詰原稿用紙にして900枚余からなる。第一編「『西行物語』の形成と展開」、第二編「明恵伝の形成と展開」の二編とし、歴史的な伝記研究ではなく、僧伝という主題のもとに、鎌倉期の二人の人物を追究し、文学史でのそれぞれの作品の位置づけをしていこうとする。

第一編は、第一章「『西行物語』と『発心集』」、第二章「『西行物語』に描かれた西行像」、第三章「『西行物語』の方法－和歌配列を中心として」、第四章「寛永本『西行物語』（西行絵詞）について」、第五章「延慶本『平家物語』の滝口入道像－西行像享受の一例として」、（資料）「慶応義塾大学付属図書館蔵『西行絵詞』」の五章と資料、第二編は、第一章「『明恵上人行状』における引用説話について－明恵伝形成に関する一試論」、第二章「『金文玉軸集』とその端に記された和歌－『明恵上人行状』の一記事から」、第三章「『明恵上人行状』中巻部の依拠資料について－「漢文行状」春日明神託宣記事を対象に」、第四章「『定真備忘録』について」、第五章「『明恵上人行状』と『高山寺縁起』」、第六章「『楞伽山伝』考－『明恵上人伝記』の歌集的部分について」、第七章「『春日権現験記絵』巻第十七・十八試論」とからなる。

『西行物語』と『発心集』とのかかわりについては、従来言及されている以上に、全体から詳細に比較分析し、構成・場面・表現にいたるまで関係の存することを指摘し、作品において西行が「心づよし」ということばで表現されていることを、諸本との関連で指摘し、後世の西行像形成に影響を与えた意義を論じる。また、『西行物語』の旅の場面は、『新古今集』の西行歌を核として形成され、『山家集』が補足として用いられていること、滝口入道は西行像の影響下に造型されていることなどを明らかにする。これらの考察の基底には、『西行物語』の伝本の詳細な考察と、本文の比較が存しており、分析の確かさに説得性を持たせているといえよう。

明恵房高弁は栂尾高山寺の僧として知られ、華厳宗中興の祖ともされる。明恵の没後（貞永元年、1232年）ほどなく、弟子の喜海がまとめたのが仮名による『明恵上人行状』であり、それが後世の明恵像の形成の基本となる。その後増補されるなどして『高山寺縁起』、2年後の建長7年（1255）には「漢文行状」等が成立し、その過程でさまざまな資料が用いられていく。どのような資料が明恵伝の造型にかかわったのかを、詳細に考察したのが第二編の骨

子である。『行状』に見られる「明恵云」として語られる夢と仏典の関係の意義、散逸している明恵歌集の『金文玉軸集』の断片から、彼の釈迦遺跡への思いを剔抉し、『行状』に欠脱している中巻部を、「漢文行状」や多くの資料を用いて復元していく。また、明恵伝の『定真備忘禄』と『行状』の関係、『高山寺縁起』『春日権現験記絵』など、多方面からの問題も考察をしていく。

論文審査の結果の要旨

西行は『新古今集』に集中最大の 94 首が入集するように、もっぱら中世を代表する歌人として位置づけられ、歴史的な伝記考証や絵巻を通じての西行像が考察されてきた。僧伝という視点からの関心は比較的等閑視されてきたともいえるが、明恵はそれ以上に検討が遅れており、近年その周辺の資料の発掘や紹介がなされるものの、本格的な『明恵上人行状記』を研究対象にされることはあまりなかった。『行状』の明恵の語ったという誕生の夢などは、『華厳経伝記』を語るために作られたのであろうとし、明恵とその仏典とのかかわりなどを詳細に考察するなど、論の展開には周到な説得力がある。『行状』の中巻部は現存していないものの、その復元には「漢文行状」が有用であるとし、そこで語られる春日権現託宣記事は『十無尽院舎利講式』と『秘密勧進帳』の、明恵者作の二つの資料に依拠していること、さらに弟子の著作した『明恵上人神現伝記』の要素も取り込まれているなどと、各種の資料を駆使して論じていく。

『行状』と同じく没後に成立した『定真備忘録』の明恵伝には、両者に共通する資料が存在したこと、『高山寺縁起』の成立には『行状』が用いられたことなど、厳密な資料操作と、作品の分析、比較等によって論を構築していく。そのほか、明恵著作の散逸した『楞伽山伝』が、明恵伝の形成に関与している実態、『春日権現験記絵』と『神現伝記』との関係など、次々と新しい指摘と考証を展開し、大きな成果を得ることができたといえよう。

申請者は冒頭に類纂形式の「往生伝」ではなく、個人伝としての僧伝を論じるとし、その具体的な人物として西行と明恵を俎上にのぼせて詳細な考察をする。ただ、両者は緊密に融合しているわけではないが、今後は親鸞とか一遍の僧伝を視野に入れる予定のようで、将来の大成を願っている。きわめて新しい発見と提言を含む力作だけに、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。